

SMBC Group CIO・CDIO スモールミーティング

説明要旨及び主な質疑応答

グループ CIO 兼グループ CDIO

谷崎 勝教

1. 説明要旨

① デジタイゼーション戦略

SMBC グループでは、デジタイゼーションを、攻めのデジタル化としての「デジタルイノベーション」「デジタルトランスフォーメーション」、守りのデジタル化としての「デジタイゼーション」「IT インフラ」の4つの領域に分けて推進している。また、取組の全体像を①Customer、②Value、③Technology、④Approach の切り口で俯瞰して推進しており、特にお客さま目線でのサービスを提供する姿勢を重視している。現時点ではリテール分野が目立つが、ホールセール・海外等にも拡大していく予定。

また、データ関連施策についてもデータの種類毎にそれぞれの目的に応じて推進している。

② 主要取組事例

● キャッシュレス戦略

SMBC グループでは、事業者・利用者双方の利便性を向上させることで、日本のキャッシュレス化推進のイニシアティブをとっていきたいと考えている。事業者に対しては、GMO ペイメントゲートウェイ社と共同で様々な支払手段に対応可能な次世代決済プラットフォームの構築を進めており、利用者に対しては、「便利」「安心・安全」「お得」の3本柱でサービス向上に向けた取組を進めている。

● 情報銀行

「個人代理人（若しくは受託者）として、データの管理・運用に努めると共にエコシステム全体の経済的自立と成長を促すもの」と捉えており、その方針に向かって準備・検討している段階。総務省の実証事業の候補として、医療データにかかる当社の提案が選定され、実用化に向けた取組を進めている。

● BTPN のデジタイゼーション

インドネシアにおいて、BTPN と共同でモバイルバンキング／デジタルバンキングサービスを展開しているほか、デジタル化による支店集約等も進めている。

③ オープンイノベーションへの取組等

イノベーションの創出にあたっては、継続的に技術やアイデアを発掘・育成する場が必要と考えており、2017年には、国内外の多様なプレーヤーがフラットに誰とでも繋がれる場として「hoops link tokyo」を渋谷に開設。設立して1年が経過し、来場者数10,000人以上、イベント開催数約220回と活況。

ブロックチェーン技術に関しては、仮想通貨という観点よりも、分散型台帳技術の観点で技術的価値が高いと考えており、実用化に向けた実証実験を推進している。また、グループ会社の日本総合研究所に先端技術ラボを設立。先端技術の研究や技術検証・評価を行っており、グループ各社でのデジタルイノベーションの推進に活用している。

④ デジタルイノベーションを支えるIT投資

IT投資総額は、大型のシステム更改案件が一服したため、現中期経営期間では減少の見込み。一方で、デジタルイノベーションによる技術革新や新規ビジネス創出等、「戦略投資」に対する資源配分を強化している。なお、IT投資にあたっては事後評価が重要と考えており、規律ある資源投入及びその効果の見える化を目的に、投資の効果をプロジェクト毎やシステム毎に検証している。

ITインフラの整備にあたっては、基幹系システムの統合や効率化をグループベースで推進。クラウドについても利用方針を定め、積極的に活用している。

AIについてはコンタクトセンター支援等、実務レベルで活用している。また、API接続による他の企業との連携も順次進めており、SMBCのインターネットバンキングのAPI接続サービスを提供している。今後も、他業界で開放されたAPIを活用して更なる連携を促進し、多様なデータを活用した新規サービスの提供を検討・推進していく方針。

グループベースでのガバナンス体制整備や人材育成についても積極的に実施している。

⑤ サイバーセキュリティ

SMBCグループは、サイバーリスクを経営のトップリスクの1つに掲げており、攻撃者の手口やシステムの貧弱性に関する情報を外部関係者と日々共有し、定期的に取り締り会等で議論・検証を行う等、経営主導による対策に取り組んでいる。

サイバーセキュリティで重要なことは人材育成だと考えており、グループ各社の支援を行う高度なセキュリティ人材の育成と、ITリテラシーの向上を企図した一般の役員向けにセキュリティ教育に取り組んでいる。

2. 主な質疑応答

Q1. デジタライゼーション推進において、FinTech 企業の台頭にどのように対抗していくのか。

A1. FinTech 企業とは、競争・競合する分野、協働する分野など様々な関係性があるため、彼らの台頭で、必ずしも既存の金融機関が全て排除されるわけではなく、業務に応じて個別に戦略を考えていくべきだと考えている。

テクノロジーの進化は、脅威というよりもむしろ、お客さまに新しいサービスを提供できるチャンスだと思っている。金融の世界だけに留まらず、プレゼンテーションの中でご説明した情報銀行のような新たな領域に挑戦することで、ビジネスチャンスが広がり、面白い銀行の形を作っていけるのではないかと。私は、金融業の未来は情報業になると考えており、その変化に対応できるかどうかを、金融機関が試されているのだと思っている。

Q2. 他の金融機関と比較して、SMBC グループの IT 投資の規模（年間予算 1,500 億円）をどう捉えているか。

A2. IT 投資の規模を比較する際は、各金融機関の事業領域の違い等を考慮する必要がある。世界各国でリテール業務を展開している金融機関であれば、当然 IT 投資も相応の規模になると考えている。今後、我々がグローバルでのリテール業務を拡大する場合は、IT 投資の必要額は今より大きくなる。もちろん、ランニング費用の抑制やグループベースでのシステム共有化、効率的な開発手法の導入等の IT 関連経費抑制施策を通じて、引き続き、効率的な運営を行っていく方針。

Q3. 基幹系システムをパブリッククラウドに移行する予定は。

A3. パブリッククラウドは、大量計算を必要とする信用リスク計測システム等、活用している領域はあるが、現時点で、お客さまの預金データを預けることは考えていない。

銀行には、「預金を預かる金融機関」としての責務があり、自社で確りと管理していく必要があると考えている。

ただし、今後のテクノロジーやセキュリティの進化に応じて、基幹系システムのパブリッククラウド活用も将来的には検討していきたい。

Q4. QRコード決済に関するSMBCグループの取組方針は。

A4. QRコード決済が中国のように決済市場を席卷するのか、それともアメリカのように決済手段の1つに留まるのか、現時点では判断が難しいと思っている。我々のキャッシュレス決済戦略では、1つの決済手段に限定することなく、様々な決済手段に対応できる仕組みにしておくことが狙いの1つ。

以 上

本資料には、当社グループの財政状態及び経営成績に関する当社グループ及びグループ各社経営陣の見解、判断または現在の予想に基づく、「将来の業績に関する記述」が含まれております。多くの場合、この記述には、「予想」、「予測」、「期待」、「意図」、「計画」、「可能性」やこれらの類義語が含まれますが、この限りではありません。また、これらの記述は、将来の業績を保証するものではなく、リスクと不確実性を内包するものであり、実際の業績は、本資料に含まれるもしくは、含まれるとみなされる「将来の業績に関する記述」で示されたものと異なる可能性があります。実際の業績に影響を与えうるリスクや不確実性としては、以下のようなものがあります。国内外の経済金融環境の悪化、当社グループのビジネス戦略が奏功しないリスク、合併事業・提携・出資・買収及び経営統合が奏功しないリスク、海外における業務拡大が奏功しないリスク、不良債権残高及び与信関係費用の増加、保有株式に係るリスクなどです。こうしたリスク及び不確実性に照らし、本資料公表日現在における「将来の業績に関する記述」を過度に信頼すべきではありません。当社グループは、いかなる「将来の業績に関する記述」について、更新や改訂をする義務を負いません。当社グループの財政状態及び経営成績や投資者の投資判断に重要な影響を及ぼす可能性がある事項については、本資料のほか、有価証券報告書等の本邦開示書類や、当社が米国証券取引委員会に提出した Form 20-F 等の米国開示書類、当社グループが公表いたしました各種開示資料のうち、最新のものを参照ください。